

ひょうごの遺跡

平成18年
10月18日発行

61号

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2-1-5 TEL 078(531)7011 FAX 078(531)7014

ホームページアドレス <http://www.hyogo-c.ed.jp/~maibun-bo/>

特集 井戸を掘る!!

世の中が便利になって、現代の我々の生活から急速に姿を消しつつあるもの。

その1つに井戸があります。映画かテレビなどの映像の世界でしかお目にかからなくなりました。しかしながら、現代のように上水道が完備していなかった古代から近代にいたるまで、人々が暮らしていくためには井戸は欠かせない施設の1つでした。

そこで、今回は井戸の世界を取り上げて、その中を覗いてみました。



但馬国分寺跡発見の井戸枠（豊岡市但馬国府・国分寺館）

◆ 弥生・古墳時代の井戸

井戸の始まりは弥生時代初め頃と考えられています。中国ではそれより古い漢代にはすでに井桁や釣瓶をもつ焼物を組み上げた井戸が普及していましたが、弥生時代前・中期の井戸は地中の井壁が崩れないよう保護する設備の無い「素掘り」の井戸です。そして、木で井壁の保護を試みる木組の井戸が登場します。最初は唐古・鍵遺跡にみられるような丸太割りめきの井戸で、板組の井戸はそれより後の時期のものと考えています。やがて板材を縦方向に組んだ井戸が現れます。弥生時代後期には、板材が内側に倒れ込まないよう保持する横棧が出現しますが、木組の井戸はなかなか普及せず、古墳時代にあっても素掘りの井戸が大勢を占めます。

若王寺遺跡の井戸

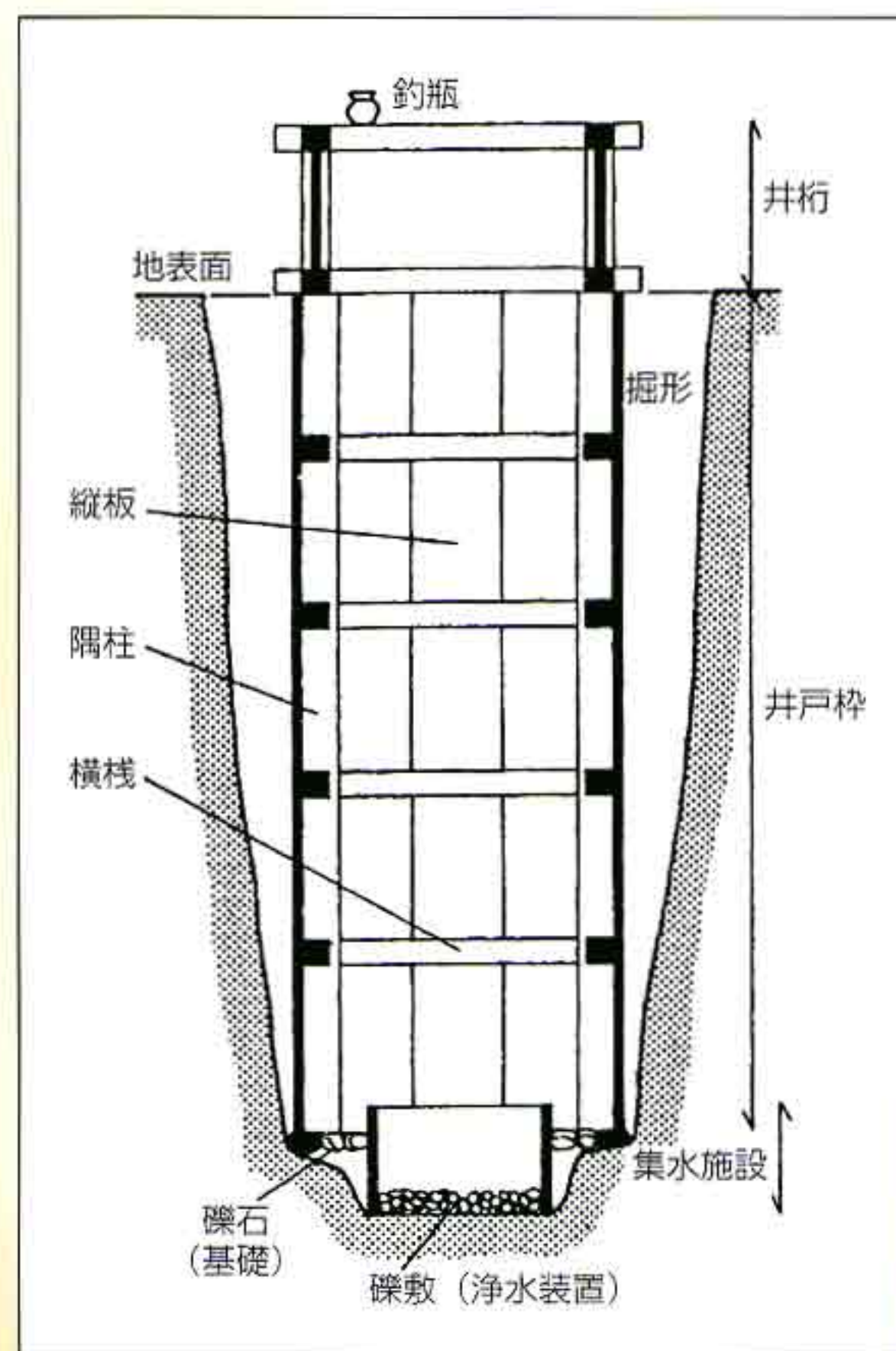
尼崎市の若王子遺跡の井戸6は、ゆるやかにカーブした長さ90cmのスギ材を2個組み合わせ井戸枠として据え付けています。土圧で変形したためか上からみると、扁平なアーモンド形をしています。井戸の堀方は東西1.1m、南北1.6mの長円形であり、深さは1.1mです。底から40cmほどのところに須恵器壺・土師器甕が置かれていました。また、井戸枠上面では、須恵器杯身・勾玉が出土しています。

時期は古墳時代の6世紀中葉頃です。鋸の無い時代なので、木材は斧で断ち割るしかありません。その割れ口を後で整形しているのびったりとはつながりませんが、木目からみて、元は同じ木材であるのは間違いありません。当時これだけ大きな木材を使用するのは船以外には考えにくいので、船材を再利用した井戸と考えられます。



井戸の構造

古代以降の井戸は大きく3つの部分に分けられます。水を汲む人の安全を図り、汚水の流入を防ぐため地上に設ける部分（井桁）、井壁の崩壊を防ぐため地下壁面に設ける部分（井戸枠）、湧き水を溜めるため、底に設ける部分（集水施設）です。井桁の部分については、井筒（井戸の縁の囲い）という呼び方もあります。



井戸の各部名称（鐘方正樹『井戸の考古学』2003より）

◆ 古代(奈良時代)の井戸

横板組の井戸(篠山市西木之部遺跡)

古代では、横板組の井戸が多く発見されています。西木之部遺跡の井戸は、横板材の両端近くを上下から切り込んで作った仕口を交互に組み合わせて積み上げる「相欠き仕口横板組」で、井籠組の一種に分類される場合もあります。

内法(内側の寸法)は一辺1.2mあり、深さ約1mが残っており、内部から奈良時代後半の墨書土器などが出土しました。

※仕口…異なる方向の木材を組み合わせ、接合する部分。方法。



SE01



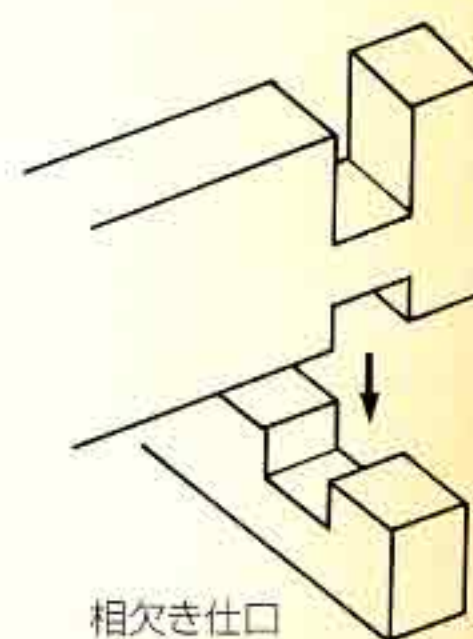
土居桁 SE02

井戸枠と水溜(伊丹市南本町遺跡)

南本町遺跡(SE01)の井戸枠は内法が一辺1.1mの相欠き仕口横板組で、井戸枠の下部には直径約70cm、高さ約60cmの曲物を据えて水溜としていました。井戸内からは「中井口」の墨書土器や須恵器・土師器・瓦・斎串など奈良時代の遺物が出土しています。さらに、南26mには、底に土居桁を設置した隅柱横板組の井戸(SE02)がありました。

土居桁の両端には相欠きの仕口と隅柱を立てる柄穴があげられています。四隅の柱にはL字形に切り欠きを施し、そこに横板をはめ込んで積み上げる、土居桁隅柱切欠き横板組とも呼ぶ構造になっています。内法は一辺70cm強とSE01よりも小規模ですが、井戸内から奈良時代の土器などが多く出土しました。

南本町遺跡は官衙的性格の遺跡とされていますが、SE01のほうが中枢部に近い位置にあり、井戸枠の組み方の格式も上と考えられます。



相欠き仕口

隅柱横板組の井戸(姫路市豆腐町遺跡)

隅柱間に横板を渡し、外側に横板を積み上げた構造になっています。

内法は一辺1.4mと大きく、深さも1.7m残り、井戸内から奈良時代の「井」の墨書土器が出土しています。

豆腐町遺跡は「郡」と書かれた土器などが出土していることから、郡(飾磨郡)に関連する役所跡の可能性の高い遺跡です。



◆ 中世(鎌倉・室町時代)の井戸

鎌倉時代になると、古代に多くみられた横板積みの井戸に代わって縦板組みの井戸が普及します。さらに、木組から石組へと変化していきます。石組井戸は、平安時代後期には上部だけ石組で作るものが出現し、乱積み石組型井戸へと変化し、集水施設も、曲物から結桶^{まげもの ゆいおけ}の利用へ変化します。室町時代以降、乱積み石組型井戸が主流となります。この他、軒瓦や土器、結桶、一石五輪塔などを積み上げた井戸や素掘りの井戸など多様な井戸がみられます。

※曲物…杉・檜などの薄く削りとった材を円形に曲げ、合わせ目を桜の皮などで綴じて作った容器
※結桶…たがをかけた桶

木組井戸(三田市川除・藤ノ木遺跡)



縦板隅柱横棧留めの井戸枠で、曲物を集水施設としています。遺跡は平安時代後期から鎌倉時代にかけての集落遺跡で、井戸が12基あり、その大半が木組井戸です。

瓦積み井戸(神戸市吉田南遺跡)



平安時代後期から鎌倉時代初期にかけては平安京大極殿や尊勝寺、東寺再建に使用された東播系瓦と同じ瓦で井戸枠を4m以上積み上げた井戸があります。文様面を内に向け積み上げられた荘厳で不思議な井戸です。

乱積み石組型井戸(たつの市福田片岡遺跡)

室町時代の時期の異なる石組井戸2基と水溜めの備前焼大甕です。

遺跡は中世山陽道(筑紫大道)沿いにあり、南北朝時代の屋敷跡や室町時代後期の方形居館跡と共に20基の井戸が発見されています。



結桶組井戸(篠山市初田館跡)

井戸は戦勝祈願した天文15(1546)年銘大般若経転読札が堀から出土した居館跡の中にあります。

三段の結桶組井戸で、最下段は正位置、2段目、3段目は逆に積み上げ、さらに上段は石組で井戸枠を構築しています。



釣瓶

釣瓶は、「字の如く、瓶を釣り上げる行為をも示しており」、もともと土器を釣瓶として使用し、水をくみ上げています。奈良時代には但馬国分寺跡(豊岡市)の大井戸から削り物の釣瓶が、鉄製の釣手具を取り付けて出土しています。中世には芝崎遺跡(神戸市西区・写真)や内場山城跡(篠山市)の井戸から箱釣瓶が、また初田館跡(篠山市)の井戸から結桶釣瓶が出土しています。箱釣瓶は利休好みの茶道具として今も使われています。

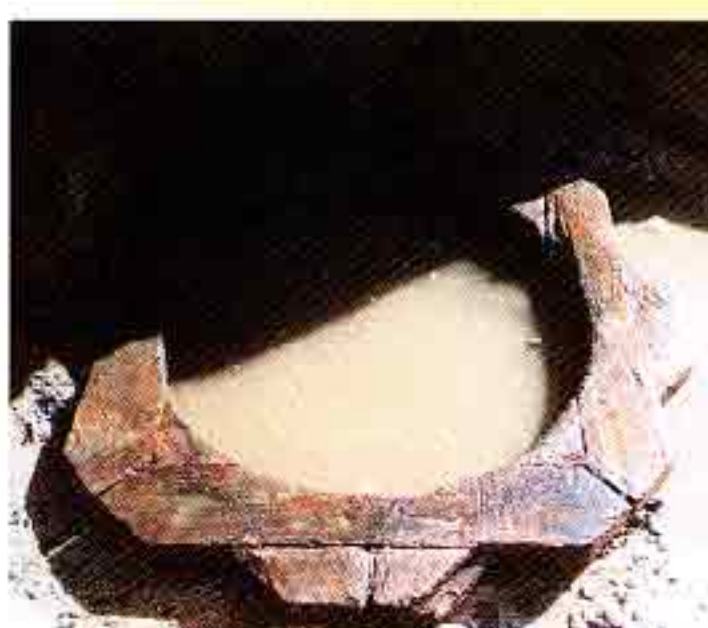
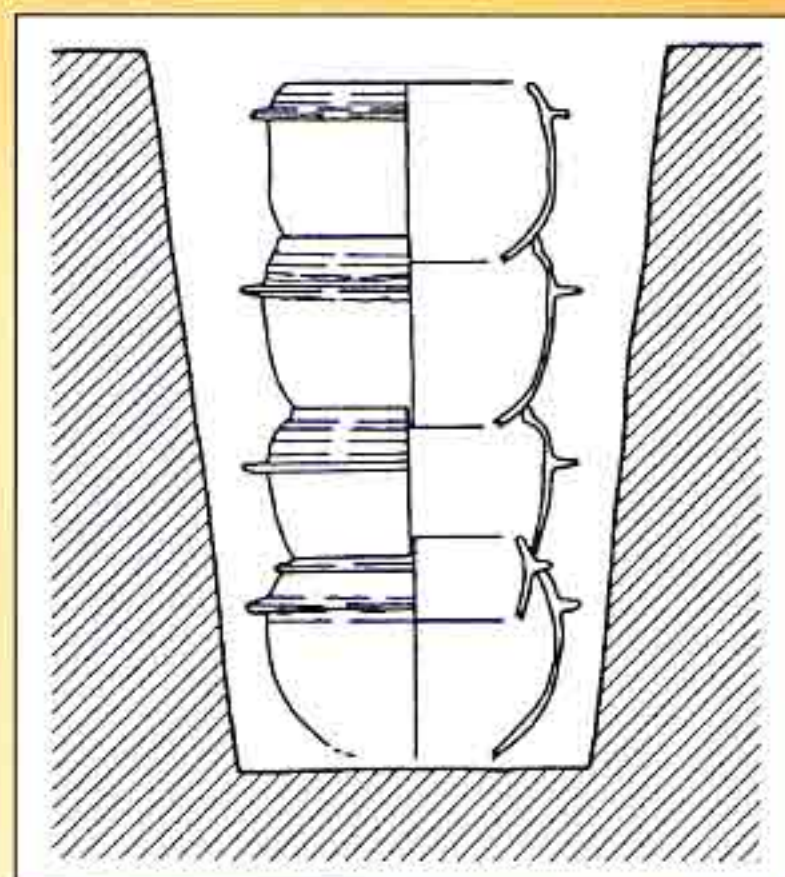


◆ 兵庫津の井戸いろいろ

鎌倉時代から江戸時代にかけて、中国貿易の中心地あるいは瀬戸内航路の中継基地として栄えた神戸市の兵庫津遺跡では、井戸枠にいろいろな材料を使用した井戸が数多く発見されています。

土器積みの井戸

井戸枠に底を打ち欠いた土師器の羽釜を使用したもので、5個の羽釜が積み重なった状態で発見されました。鎌倉時代の終わりから南北朝時代頃のもので、羽釜の底に煤が付着していたことから、当初煮炊きに使用されていたものが、後に井戸枠に転用されたことが分かります。



石積みの井戸

井戸底の水を溜める集水部分に、多くは桶が使われていましたが、桶のほかに、曲物を使用したもの、木の幹を削りぬいた剝物が使用されていたものなどがみつかっています。さらに、特殊なものでは、花崗岩を筒形に削り抜いた井戸枠を用いて、その下に木製の礎盤を敷いたものも発見されています。

瓦積みの井戸

江戸時代の終わり頃から、井戸枠に専用に作られた瓦を使用したものが出現します。瓦の外側にはへうで山形の文様がつけられたものがあり、これで瓦がずり落ちないようにしています。瓦積みの井戸は、第2次世界大戦頃まで使用されていました。

井戸の中からは土器・陶磁器のほか、漆器の椀、桶、曲物、下駄、簀、建築部材などの木製品も多く出土しています。これらの井戸は港町の中の町屋に付属したものと考えられ、中世から近世にかけての都市部での庶民生活を考える上で貴重な資料です。



🌈🌟🌟🌟 🌟🌟🌟🌟 へーい「マンボ」 印南野台地の横井戸

「マンボ」とは農業用の素掘りのトンネルのことで横井戸ともよばれます。印南野台地（加古郡稲美町～神戸市西区神出町）には大きな河川がないために水利の便が悪く、開発が遅れていました。近世になって用水の開削やため池の造成によってようやく新田の開発が行なわれようになりました。開発は明治時代以降も続き、さらに水が必要となりました。そのために「マンボ」をつくって川などから水を引いて農業用の水を確保しました。しかし、近年、東播用水の完成などにより、その役割は終わり、姿を消してしまいました。

（参考 森本真一『印南野台地の農業用水利施設「マンボ」について』）



神戸市西区神出町北字泉谷のマンボ

◆ 古代(奈良・平安時代)の井戸から見つかった文字



古代では文字を使用するのは、貴族や役人、僧侶など限られた人たちだけでした。文字が見つかるということは、その遺跡が役所や寺院関係の遺跡であった可能性を示す証拠の1つになります。

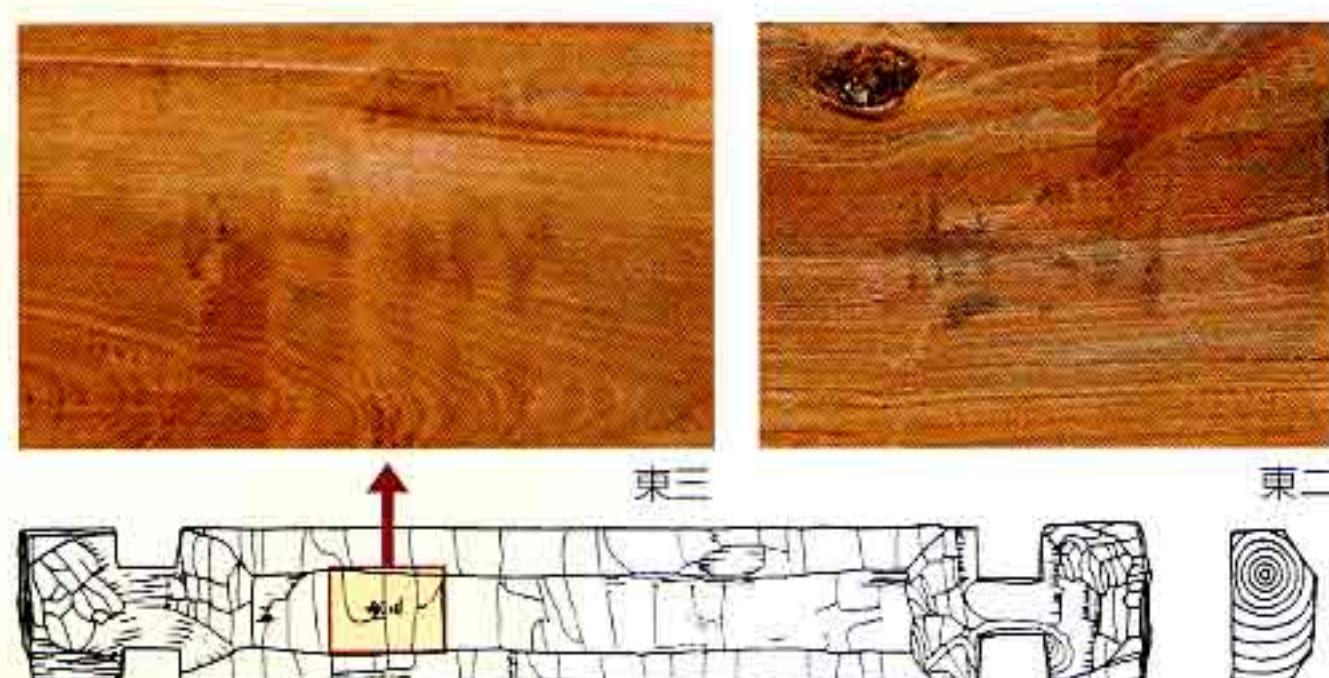
土器に書かれた文字

井戸の埋め土の中から出てくる土器の外表面や底に、文字が墨書きされているものがあります(墨書土器)。その多くは、人名や役所の部署名などが記されています。

三田市の川除・藤ノ木遺跡の井戸から出土した墨書土器には「田中」と書かれていました。

井戸枠に書かれた文字

井戸枠の部材にも文字が書かれている場合があります。例えば井戸作りの職人が、あらかじめ他の場所で作った井戸枠を現地で組み立てる際に部材の場所を間違えないように印を付けたものです。姫路市上原田遺跡から出土した奈良時代の井戸枠には「東二」、「東三」、「北二」など部材の位置や番号が記されていました。



井戸に捧げられた祈り

井戸を発掘調査すると土器の他にも火きり臼(火を付ける道具)、横槌(写真3)、木錘(編み物等をする際に使用する木の錘・写真4)、箸、櫛、鎌(写真1)など様々な日用品が出てきます。これらの中には、井戸を使用しているときに中に落としてしまったものや、井戸を埋め戻す際の埋め土に混じっていたものもあるでしょう。

しかし、呪符木簡(まじないの字句が書かれた木の札・写真2)のように、あきらかに何らかの祈り、願いをこめて、井戸に入れたと考えられるものもあります。今でも井戸を埋め戻す際に、井戸の神様が窒息しないように節を抜いた竹などの管を入れて埋め戻すという風習が残っているところがあります。当時の人々は、井戸にどのような祈りを捧げたのでしょうか。



神戸市 二郎宮ノ前遺跡の井戸(写真1)



(写真2)



(写真3)



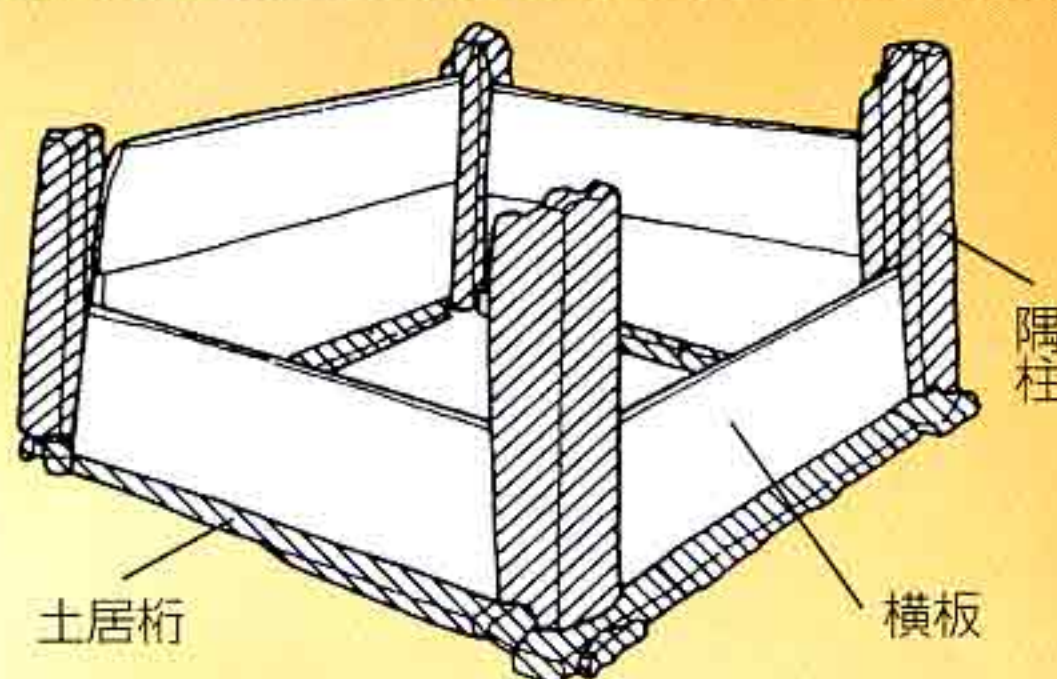
(写真4)

地震で倒壊した井戸 ―豊岡市出石町砂入遺跡―

砂入遺跡で発見された平安時代の井戸は、右のように、溝を切った4本の隅柱に横板を落とし込んで組み立てられています。その下には両端に孔を空けた板を正方形に組んだ土台（土居桁）が敷かれており、隅柱の下端に削り出した柄をこの孔に差し込みます。

ところが、この井戸は写真のように隅柱が大きく傾いた上に横板が外れ、中にあった集水用の曲物も外に飛び出しています。よく見ると井戸の周りには白い砂の筋が伸びています。これは液状化現象と言って巨大地震の揺れによって地下の砂が地表に向かって噴き出した痕なのです。

地層の重なりや出土品から、この井戸は平安時代（9世紀の後半～10世紀頃）に発生した大きな地震によって倒壊したと考えられています。

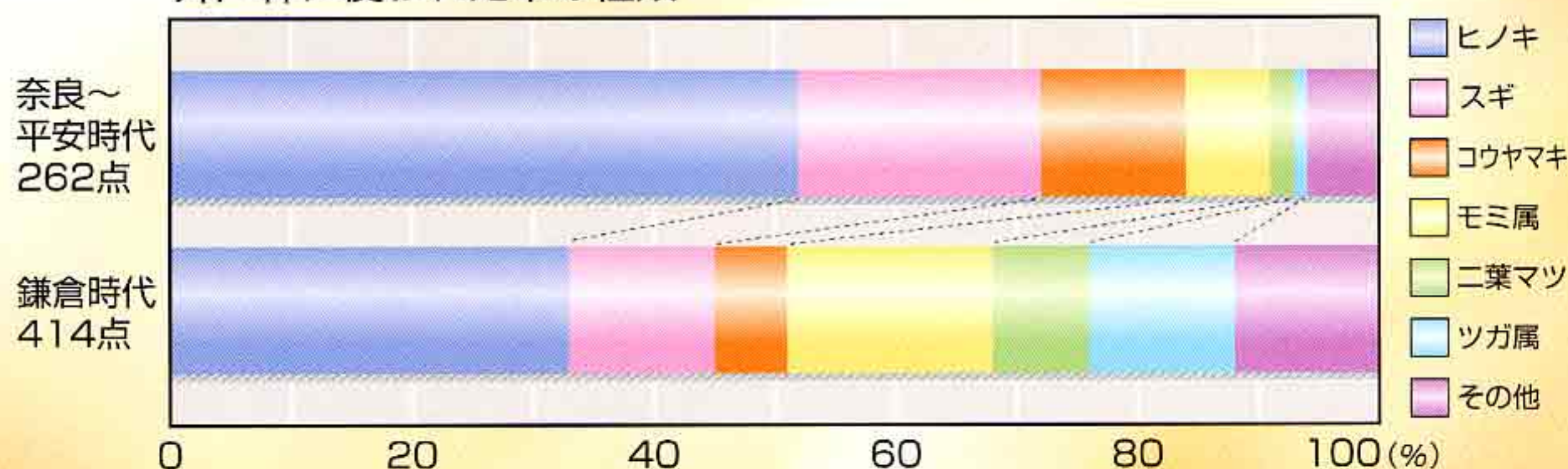


井戸枠に使われた木

井戸枠の用材としてはヒノキ、スギなど水に濡れても腐りにくい針葉樹が多く用いられています。また、奈良の平城京をはじめ、各地の井戸では柱などの廃材が二次利用されることも多く、建物の用材とも関係がありそうです。

兵庫県下の奈良時代～鎌倉時代の井戸を調べると、奈良～平安時代の井戸ではヒノキとスギ、コウヤマキで8割以上を占めます。ところが、鎌倉時代になるとモミ属やツガ属、二葉マツが増加しています。ヒノキなどの資源が減少したために、必ずしも水に強いわけではないモミ属などの木も利用されるようになったのかもしれません。

井戸枠に使われた木の種類



第4回 埋蔵文化財収蔵庫展

考古楽祭

井戸を のぞけば...

お知らせ

埋蔵文化財調査事務所では、今年も収蔵庫の公開・展示会「考古楽祭」を開催します。収納されている大量の出土品と共に、井戸をテーマとした展示を行います。

期 間 平成18年10月25日(水)～10月31日(火)
午前10時～午後3時

場 所 魚住分館 TEL 078-947-4131
明石市魚住町清水字立合池の下630-1

編 集 後 記

父の田舎では井戸がありました。風呂は五右衛門風呂で、井戸から水を汲んで薪でお湯を沸かしていました。昭和30年代の頃まではどこの家にも井戸がありました。台所は土間で、つるべで水を汲んでいましたが、そのうちに井戸に蓋をしてポンプが設置されました。やがて、土間の台所に床が貼られ、井戸は床の下に埋められてしまいました。今では水だけでなくお湯も瞬時に蛇口から出てくる、便利な世の中になりました。何年後かには「井戸端会議」や「秋の日は釣瓶落し」という言葉も死語になるかもしれませんね。(S.M.)

